

「水より製法」の和紙糸

備後撚糸(福山市)

「紙は水に弱い」。そんな固定観念を、備後撚糸は覆した。伝統の糸より技術を応用し、水分を含ませた和紙を糸に加工する独自の「水より製法」を開発した。滑らかで軽い、新しい糸を生み出し、ジーンズやシャツ、タオル向けなどの需要を開拓。低迷が続く繊維業界の中で、日本古来の和紙に着目して復活を懸ける。

(小島正和)

「見た目は普通の糸。紙でのテープ状に切った和紙を取っ手、畳模様編んだ製と聞いて驚く繊維メーカー紙を、専用の撚糸機でよテープルクロスなど、既カーもある」。直径七ミリほど仕上げた糸である。綿糸に比べ重さは約半滑らかさを生む秘密は

に、ワックスなどを配合した独自の溶液に数時間漬ける。和紙が水分を含んだ柔らかい状態で加工するため、出来上がった糸の表面は丸みを帯び滑らかなになる。溶液と和紙の繊維の化学反応によって強度も高まるという。同社は創業以来、繊維メーカーや縫製会社などの元請けの注文を受け、綿糸や合成繊維の撚糸加工を手掛けてきた。そんな受け身の姿勢を改め、

溶液工夫滑らかさを生む

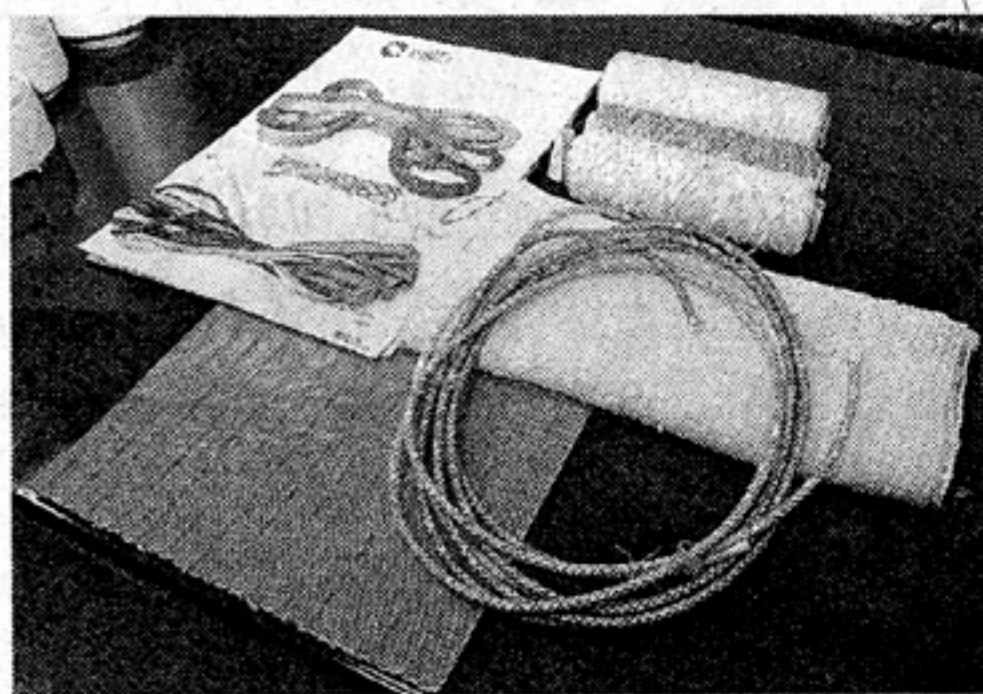
ルを並べながら、光成猛分で、表面にけはが立た二〇〇四年秋に開発した社長(左)はうれしそうに話す。幅一ミから四ミまで、かすり用タオル、紙袋の和紙を撚糸機にかける前

新製法の開発に着手したのは〇三年春だ。当時、元請けの中国への生産移転などが進み、

クリック

撚糸 複数の糸を合わせてよったり、1本の糸をねじったりして糸の強度を高める工程。撚糸業者は繊維メーカーなどから依頼で、綿糸、合繊繊維、麻などさまざまな糸を加工する。撚糸機は、高速回転する軸に装着したロール状の糸を引っ張り上げ、よりながら別のロールに巻き付けていく。

タオル、クロス 製品化進む



ひも、タオルなど、新製法の糸から作った製品

に本格的に取引組んだ業者はなかった。「誰も試したことがないならチャンス。『駄目もと』でやってみよう」と協力会社の川崎撚糸(広島県神辺町)と研究を始めた。水を含んだ和紙の比重に適した撚糸機で、商品化も近いという。

受注が大幅に減少していた。売上高はピークの一九九五、九六年ごろの半分に落ち込んでいた。同業者が次々と廃業していた。残ったわれわれが努力しなければ」と光成社長は奮起した。

「駄目もと」で研究

再起をかけて着目した素材が和紙だった。撚糸業界では「和紙は水に漬けたら切れる」という先入観が強く、水より製法

の回転速度や、張力などの微調整に細心の注意を払い、テストを繰り返した。テープ状に細く切った和紙に水が浸透するまでの時間を何度も分析した。課題は糸の質を均一にすることだった。水に浸した和紙のロールを撚糸機にかけて、次第に空気に触れた和紙の乾燥が始まり、糸の品質にむらができる。そこで、ロールの収納部をふたで覆うことを考案。撚糸機を改造、ロールの湿り具合を一定に保つことに成功した。

「和紙には独特の癒やしの雰囲気がある。土中で分解されやすいため、地球環境にも優しい。癒やしとエコ、この二つをアピールすれば市場は広がるはず」。光成社長は意欲を見せる。

糸より強度アップ

研究開始から一年半後

意欲を見せる。

《会社メモ》福山市芦田町。1927(昭和2)年、光成猛社長のおじで故・光成源一氏が創業。45年に同じ町内の現在地へ移転し、63年に株式会社化した。資本金2500万円。2005年3月期の売上高は1億8000万円。従業員18人。

水より製法で和紙をよった糸の出来栄を見る光成社長